

## 令和3年度 第2回文化芸術部会 議事概要

■日時：令和4年3月18日（金）午前10時～

■方法：オンライン部会

■出席委員(五十音順・敬称略・◎部会長、○職務代理者)：

○今中 博之	社会福祉法人 素王会 理事長
◎坂本 ヒロ子	社会福祉法人 大阪手をつなぐ育成会 理事長
鈴木 京子	ビッグ・アイ共働機構 アーツエグゼクティブプロデューサー
服部 正	甲南大学 文学部 人間科学科 教授
宮本 典子	オフィス・エヌ 代表、アートマネージャー、アートコンサルタント
森田 かずよ	NPO 法人ピースポットワンフォー 理事長、女優、ダンサー

■概要：

- ・障がい者文化芸術活動推進に関する計画について、承認された。
- ・今後の府の施策の方向性について、意見交換を行った。

■主な意見：

### 議題2より

- ・人材育成の観点について、府が委託している舞台芸術オープンカレッジにおいて、これまでアシスタントとして育成してきた人材を「講師」として、新しい人材を「アシスタント」として事業に関わってもらうに至った。創造活動、発表の機会を創出する取組みについては「ともいき」で舞台発表の機会を設けるなどのほか、府の他事業との連携を実施。アート活動であるアバウト・ミー企画展においても、過去に出展した事業所がオブザーバーとしてサポート側に回るようになった。また、回を重ねるごとに、作品と作家、周縁に居る人たちとのかかわりなどの考察が深まってきている。相談件数は件数計上ができておらず、年度末に改めて報告する。
- ・コロナ禍においても展覧会の会期を延長するなど工夫しながら実施するとともに、パークホテル東京では長期作品展示を行った。また、今年度は新しい作家を3名紹介した。絵画の原画販売事業においては、大きな作品が動く売り上げが伸びる一方、作家の価格帯が高額になっていく中で、それに見合っ購入してくれる顧客を見つけることに課題を感じていることから、海外や東京方面など、高額商品を購入してくれる新しい顧客層へのアピールが必要ではないかと感じているが、コロナ禍の中で積極的な動きがしづらい状況であった。
- ・アバウトミー5が会場を変更した理由は、カペイシャス事業においては、新しい作家の開拓はどうしているのか。同じ事業所所属の作家が多く、新規性が欠けている印象を受けたが。

- ・変更のきっかけは、過去開催してきたディアモールのレンタルスペースが、大阪市の情報サービスセンターになったことから、府外からの来場者も多く、大阪市内で交通至便であること、アクセシビリティ対応、予算を考え、今回の心齋橋を会場とした。
- ・マーケット市場は、「アートバブル」状況もあり、必ずしもコロナ禍が理由で落ち込んでいるとはあまり感じないが、著名作家の作品などが売れていて、カペイシャスが扱っているような知名度が高くない作家にとっては厳しい状況と感じる。新規開拓について、府の公募展がなくなったこともあり、新たな作家が出てきているのかもしれないが、リサーチしきれていないことは認識している。数年ごとに公募展があってもよいのではないかと感じている。この2年、コロナ禍において、従来取引のある事業所等とのやり取りは、お互いの信頼関係が構築されているのでさほど影響がないが、新規開拓がしづらい状況。マーケットに対する体感は、府内事業所の状況も知りたい。
- ・当事業所では、コロナで活動を休止していた期間があるが、その後、売り上げは去年より今年の方が伸びている状況。当事業所は20年の活動実績があるが、新しい作家が次々に出ているというわけではない。アートフェア東京に出展し始めて9年目を迎え、1年目の売り上げはさっぱりだったが、回数を重ねる中で、それぞれの作家に顧客がつき、フェア以外の場でも作品が売れるようになってきたという実績がある。また、コロナ禍になるか、その少し前から、企業がSDGsに高い関心があり、展覧会などを通さず、直接取引があったり、百貨店は収支率が関係するので、「売れる作品」を求めており、当事業所の作品を扱ってくれるようになってきた。
- ・府は数年前から公募展形式の事業を実施していないが、全国的には例えば日本財団でも公募展を実施し、約2,000点の応募がある。応募者の動向については、これまで西日本中心だったが、現在は全国的に広がっている。ただ、新規事業所が積極的に作品を出してきている印象はない。

### 議題3より

- ・絵画販売においても人材育成がテーマと感じている。アートマネージャーを育てていきたいと考えたときに、障がいのある人の作品を扱えない、この分野に関心のない人が多い。アートマネージャー人材自体が関西圏では不足しているように感じており、関心がある人をどのように見つけたらよいのか、例えば大学生では、芸術大学などの方が可能性があるのか、意見交換したい。
- ・人材育成については、成功事例をリサーチすべきではないか。例えば、関西では京都府など。共生の展覧会についてもこの数年は特に充実した、研ぎ澄まされた内容で開催している。京都府は障がい者アートのためのギャラリースペース「co-jin」を立ち上げ、そこで

はプロの若手、中堅作家が雇用されている。職員は、それぞれの立場でいるんなところに調査に行き、障がいのある人の作品を一つ一つ丁寧に、自身も表現者として当事者と関わりながら、表現の意味について対等な関係の中で考察し、それを展覧会という形にしている。さらに、自身の作家としての活動の場においても、ギャラリーで培ったキャリアを活かして自身の作品の中にその成長を反映しており、そういう人材を育成することで、好循環が生まれている。一方、公立の大規模な美術館では、必ずしも障がい者の作品の展覧会の開催に積極的なわけではない。学芸員資格を持っている人を雇用して担当に充てたものの、その人本来の専門とは異なる分野であるために定着していない事例もあり、やはり、障がい者アートにきちんと向き合いたい、そのマインドを持った人材を育てていくということが成功事例につながるのではないかと。

- 京都「co-jin」は大阪府から距離も近く、活動の充実を身近に感じていたので、その意見はよく理解できる。
- 大阪府でもそのような取り組みができるとういですが。
- 先ほど委員から、SDGs の取り組みに関心のある企業が増えてきているという話があったが、私の事業でも問合せが立て続けにあり、今後、2次利用の取り組みを積極的に検討すべきか考えている。奈良県「エイブルアート」を紹介することなどがあるが、府内でつながりたい企業から相談があったときに、他府県を紹介するのではなく、府で窓口機能があればよいと感じている。
- ダブディビ・デザイン 柘伸江氏が実施したクラウドファンディングは目標額を大幅に超え、京都のワコールの展示スペースでも展示されるなど、ムーブメントとして関心が高まっていると感じる。
- 大阪万博 2025 についてはいかがか。
- 大阪府では、パフォーマンスアーツの分野も長年にわたり事業展開してきたこともあって、小さいころからオープンカレッジに参加してきた参加者もいる。オープンカレッジの参加者の中には、オリパラ開会式にも数名出演するなど、府内で表現者としての人材が育ってきている。オリパラの延長や人数の制限により、府として集団での参加はかなわなかったが、2025 大阪・関西万博では、表現活動の発表の場をめざした取り組みとして検討したい。
- オープンカレッジについては、モチベーションアップのために、何かの目標が必要と感じる。頑張っているけど、毎年オーディションに落ちている人は、ひどく落ち込んでしまっ

たりするので、大きな目標や、近い目標などがあるとより良い変化になるのではないか。

- 大阪万博や、SDG s の取組みは、障がいのある方も羽ばたける機会につながると思う。今日はいろいろな意見が出されたが、今後の府の取組みとして、検討をお願いします。